

西洋からの刺激を受け発達した日本の「洋学」は、江戸時代初期から後期まで医学と兵学に重点を置いていた。一六五〇年以降、熟練した出島商館医と彼らの患者だった身分の高い日本人たちのおかげで、新しい治療法や軟薬、膏薬が日本に普及した。大砲と臼砲及びそれに必要な測量術の受容はそれより早く始まっていたが、徳川体制の安定化にともない、兵学に対する幕府の関心は一世紀余にわたり後退してしまう。それに対して医学は洋学の中核であり続け、医師たちの関心が衰えることはなかった。その背景にあったのは医療の有用性だけではない。社会的拘束の少ない日本人医師たちは、比較的自由に新知識を学べるという極めて恵まれた境遇にいたのである。

資源が乏しく、輸出力も限られていた日本では、経済が常に政策に決定的影響を及ぼしていた。金銀の流出を抑えるため、幕府は日蘭貿易の形態を数回にわたり再編し、一六六〇年代から不要とされる品々の輸入を禁止したり、国内資源の開発に取り組んだりしていた。紅毛(こうま)医療もその影響を受け、財政的負担の大きい高価な舶来薬に代わるものとして、本草研究や菓草

プロフィール
Wolfgang MICHEL, 1946年生まれ。ドイツ・フランクフルト大学卒。1974年来日。九州大学助教授、教授、研究院長、副学長など歴任。2010年、定年退職。九州大学名誉教授。日欧文化交流史、医史学及び洋学の研究。1995年、日本医史学会学術奨励賞受賞、2004年、ドイツ連邦共和国功労十字勲章。M.A.(東洋言語文化科学)、博士(文化科学)。http://wolfgangmichel.web.fc2.com/



江戸期の医師の「越境」と好奇心

ヴォルフガング・ミヒエル

植物の国産化が大いに促進された。適塾や芝蘭堂のような大規模な蘭学塾が現れる前に、知の伝播において中心的役割を果たしたのは長崎の阿蘭陀通詞だった。彼らの語学力は、杉田玄白が『蘭学事始』で示唆しているよりも遙かに優れていた。また、医学を志す通詞家は代々、書籍、写本、医薬品、医療器械などを大量に収集していた。国外への道は閉ざされていたが、彼らの私塾で学ぶ門下生にとって、外の世界はより身近に感じられたことだろう。さらに、この「長崎遊学」により次第に全国各地に広がる交流網が形成され、一八世紀中頃から繰り返し開催された薬品会(やくひんかい)は一種の臨時博物館として、ものと情報の流布をさらに拡充した。そして、西洋を凌ぐほどの出版業の隆盛にもかかわらず、写本の伝統は幕末まで健在だったので、奥地の医師にも最新の情報が伝わり、いわゆる在村蘭学を支えていた。

日蘭交流の成果は西洋医学の理論的背景の理解や、ヨーロッパにおける近代医学のダイナミズムの認識にはいたらなかった。とはいえ、約二世紀にわたり日本の医師は数々の治療法や医薬品を導入し、人体の構造にも眼を向けるようになり、言葉の壁を自力で乗り越え、新しい概念的基盤を固めていったのである。

月刊
みんぱく

11月号日次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文 江戸期の医師の「越境」と好奇心 ヴォルフガング・ミヒエル</p> <p>2 特集 どこへ行く日本学?</p> <p>3 アジア学のみかた ——ヨーロッパの日本語学習者からみた日本 リーッカ・ランシサルミ</p> <p>4 人類学における日本研究の50年 中牧 弘允</p> <p>6 日本の政治力と文化力 ハルト・ガーンズ</p> <p>7 日本学の行方 フロリアン・クルマス</p> <p>8 中国の日本文化を見るまなざし——茶道をめぐって 曹 建南</p> <p>10 研究フォーラム こども、いのち、医療 道信 良子</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行 森の中の日本資料——フィンランド・国立語文化博物館 小島 摩文</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫 面白いモノ その3 つくりものは現場で作られる 笹原 亮二</p> <p>18 多文化をあきなう 鳥の笛からはじまった 下川 祐真</p> <p>20 異聞逸聞 マンガ文化は永遠か 庄司 博史</p> <p>21 みんぱく私の逸品 蓋付菱形香炉の置物 ヨーゼフ・クライナー</p> <p>22 フィールドで考える 鹿の涙、人の涙——笹崎鹿踊りの復活 林 勲男</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|